

山田 龍雄

(よかネットNO.33 1998.5)

稲築町鴨生の「史跡探訪ウォークラリー」に参加  
嘉穂郡稲築町は、筑豊地域のほぼ中央、北側には飯塚市が隣接し、昭和20～30年代は炭鉱町として大いににぎわった町である。

私は、この稲築町では住宅関係の仕事のお手伝いを7～8年間させていただいているが、振り返ってみると町の歴史のことについては、あまり知らないことに気づいた。そこで、去る3月中旬の日曜日に、稲築町生涯学習ボランティア「あすなる会」の主催による、「ふるさとの昔を訪ねて」という、稲築町鴨生周辺の文化史跡を歩き訪ねる会に参加させていただいた。この会で初めて稲築町鴨生と山上憶良との関係、また、山上憶良の歌碑に係わる色々ないきさつを知ることとなった。

鴨生周辺に残る条里制遺構の地名

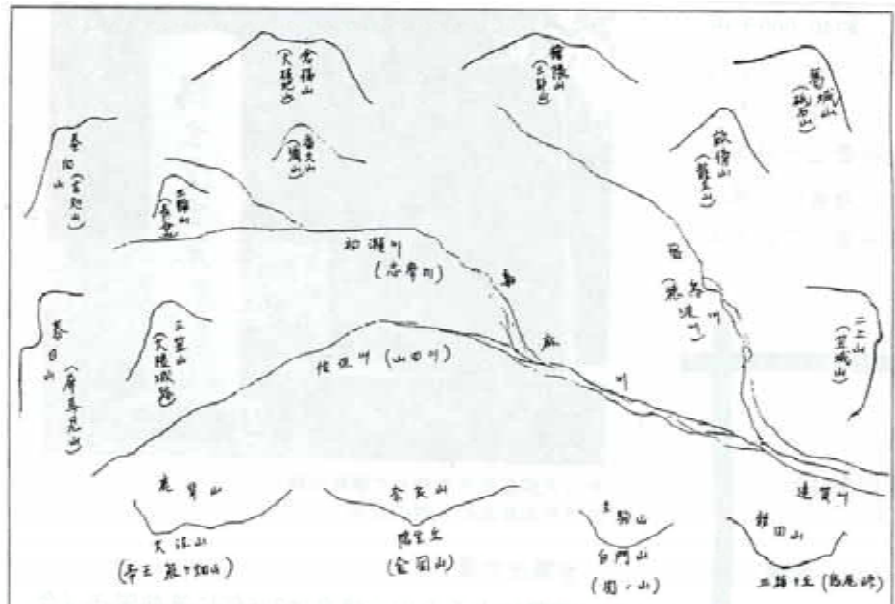
鴨生周辺の地積図には、中の坪、縄手頭、三十六などの条里制に遺構を残す地名が今も残っているとのことである。条里制の一坪周囲を東方面は「東縄本」、西方面は「西縄本」と呼ぶらしく、

「縄手頭」という地名はその名残ではないかと言われている。また、鴨生には大倉という地名が残っており、これは鎌屯倉（大和朝廷の直轄領から収穫した稲米を貯蓄する倉）がこの地にあったからであろうと推定されている。

「銀(しろかね)も 金(くがね)も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも」をはじめ嘉摩郡三部作を鴨生で選定

文献によると山上憶良は726年に筑前国守（今で言うと県知事の役、当時67歳）として太宰府に來ている。この国守の時に嘉摩郡（山田川・遠賀川の東側一帯の地域を示す）を巡察した折、郡役所に立ち寄り選定したのが、後に嘉摩三部作という万葉集に納められている歌である。この郡役所があったのが鴨生であったであろうというのが定説となっている。

この嘉摩三部作は選定とあるので、憶良が既に手がけていた歌を郡役所で筆を加え、仕上げたのでであろうと言われている。私は憶良の歌の中で、



図表1 与土郎氏が筑紫地方と奈良地方の地図から思い描いた相似。山田川を奈良の佐保川にみたて、北側には香久山（彌山）、三笠山（大隈城跡）が、南には生駒山（関ノ山）がみえる。

最も親しまれている歌が、稲築鴨生で選定されたことに驚くとともに、憶良と鴨生との関係を知った金丸与志郎氏の憶良への思いが、桑原武夫先生（京都大学名誉教授）や万葉集の大家である犬養孝先生（東京大学名誉教授）など著名な文学者を鴨生の地へ呼び寄せていることに驚かされた。

地元の元校長先生の思いは今の娘さんに引き継がれる

著名な先生方をこの地へ呼び寄せたいきさつや、憶良のことをどうしても知りたくなり、志を引き継いだ娘さん宅を訪ねた。約束の時間に着くと、今はご高齢である嘉与子さんが直ぐに出てこられ、いろいろとお話を伺うことができた。最初は1時間ほどのつもりであったのが、嘉代子さんは憶良のことになると時間が止まるらしく（これは本人の弁）、約2時間近くの聴講を受けることとなった。

話は少し長くなるが、鴨生憶良物語のいきさつについて、今回、嘉与子さんからうかがったことと併せて、以前に書かれた講演録の中から抜粋する。

- ・与志郎氏は昭和32年に桑原武夫先生編集の「一日一言」という本の中に憶良の「子等を思う歌」が掲載されており、この歌の紹介の記事で小さく「飯塚市外鴨生」と書かれていたのを知る。
- ・与志郎氏は、早速桑原先生に手紙を出し、問い合わせ、稲築鴨生と憶良との関係が間違いないことを確認する。
- ・その後、鴨生の地に歌碑を建てることを心に誓い、関係者をお願いするとともに、昭和43年に「憶良まつり短歌会」を発足する。
- ・昭和49年稲築公園内に「子等を思う歌」の歌碑建立。
- ・昭和49年6月に桑原武夫先生が福岡に来られたついでに、金丸邸を訪ねる。

- ・平成2年に嘉与子さんら有志5人で郡所役場跡に「子等を思う歌」の歌碑を移設（台座を5人でつくる。奇しくも亡き父、与志郎氏の誕生日に歌碑が台座に置かれたとのこと）。
- ・平成5年に嘉与子さんは「ノーサイド」（文芸春秋発行の月刊誌）の中の犬養孝先生のインタビュー記事で「万葉の歌が一首でもあるという事は、その土地にとってかけがえ無い財産である。」という言葉に感銘を受け、先生に手紙を出す。
- ・平成4年に唐津市神集島の万葉歌碑建立の講演会に犬養先生から招かれる。この時、先生揮毫の歌碑建立をお願いする。
- ・平成5年に鴨生公園内に犬養先生揮毫による歌碑2首（宴を罷るの歌、梅花の歌）を建立。犬養先生揮毫による歌碑は全国で100以上あり、鴨生公園内2首が108基、109基目にあたる。
- ・平成9年自宅庭に憶良や与志郎氏の短歌の歌碑を所々に鎮座させた「鴨生憶良苑」を建立する。この苑の名前の揮毫は名付け親である犬養先生のものである。

与志郎氏の「憶良と鴨生」との発見から「鴨生憶良苑」完成までの約40年間のいきさつをほんの20数行でまとめてしまったが、この間にはもっと他の多くの関係者との関わりもあったようだ。限られた紙面では到底説明できない。

全国から万葉集ファンが「鴨生」を訪ねる

嘉与子さんの話によると、全国各地には個人的な万葉集ファンや集まりがあり、全国の万葉歌碑の建っているところを訪ね回っている人もいるそう。一昨年が神奈川県、昨年が東京の人が、わざわざ「鴨生憶良苑」を訪れている。

話は元に戻るが、「鴨生歴史探訪」では地元のお年寄りの方も多く参加していた。中には「40年も地元にて、初めて憶良と鴨生のことを知った」などというような方もいた。当たり前の話で



右は犬養孝先生の命名で揮毫の碑  
左は与志郎氏の短歌の歌碑

はあるが、わざわざ関東から訪ねてくる人もいるし、近くにも興味の無い人や「子等を思う歌」という憶良歌碑という全国区レベルの話が伝わっていない人との意識の差は、こんなにも違うものかと思う。

町は「憶良」の見せ方や知らせ方を工夫してはどうか

稲築の文化史跡を案内している「稲築マップ」をみると、なんと鴨生公園内の歌碑や鴨生憶良苑がプロットされていなく、鴨生と山上憶良との関係の記事もない。また、道路沿いには公共施設への案内サインは要所々に立てられてはいるが、肝心の歌碑の案内サインがないところもある。鴨生公園内の案内板にもグラウンドや体育館の位置は示してある（これは無くても見ればわかる）のみで、歌碑の位置がなく、歌碑を訪ねてくる人は裏側にある犬養先生揮毫の2首は見落としていくとのことであった。

「地元の人は見慣れているのか、価値がわからないせいなのか、貴重な地域資源を見過ごしている」と良く言われるが、町はこの全国区レベルの物語を町民一人ひとりに伝え、憶良の歌を、その心に響かせるようにしてはどうだろうか。

最後に金丸与志郎氏が、憶良が筑前に赴任し、ふるさとを思い詠った短歌や、奈良地方と筑紫地方との地図から思い描いて作成した相似図は興味深い。